

今回は、坂井先生が講演会で使われてる図を使ってお話。僕たちが「発達障がい理解の為に訪問授業」に地域の小中学校を回っている理由の一つでもあります。本人の力と、支援の量。と、さらに周りの理解。周囲の人たち皆が環境だという事です。久田

第 77 回 『わかるように伝えていますか』

環境を整えることで

香川大学 坂井 聡

環境が障がいを作り出すのであるから、その人が参加したり、活動したりすることには、環境が大きな影響を与えることになるでしょう。

図1は、ICFの概念図です。それぞれの矢印が双方向に向けられているということに気づくでしょう。これはどういうことを示しているのか、環境因子を例にして考えてみましょう。参加することや活動することを可能にするために、環境を整える。環境を整えることで、参加や活動ができるようになっていく。そうすると、新たな環境を整える必要が生じる。個人因子にも影響を与えるので、対象となる人の実態が変化したら、それに対応した環境も考えなくてはならないということなのです。このような意味で、一方的なものではなく、双方向に影響を与え合っているということなので、双方向の矢印で表されているのです。

環境を整えるためには、障がいのある人がもっている特性と力を本人と周囲が理解する必要があります。

そうしなければ、的外れな環境になってしまうことになりかねないからです。状態としての障がいを改善するためには、その人が何に困っているのかについて知らなければならないことになります。そうすることで、その人に合った環境を整えることが可能になり本来その人がもっている力を発揮できるからです。

図2は、環境が整うことによって力を発揮することができるということを示しています。左から伸びる力は、その人がもっている力です。その人のもっている力の大きさに応じて、支援ができればよいということを表しています。つまり、支援の方から伸びている矢印は、支援する側が環境を整えることによって生まれる力の大きさを示しているということなのです。このように、その人のもっている力に応じて支援をすれば、誰もが同じことをすることが可能になるということなのではないかと思います。



図 1

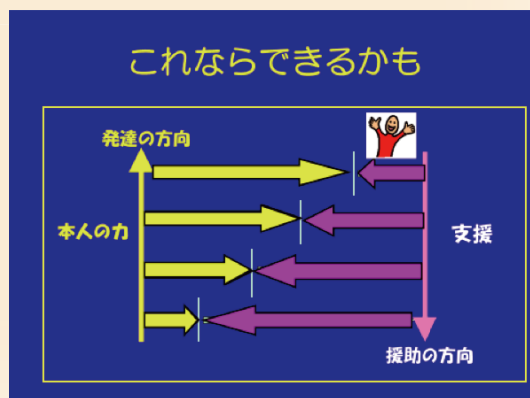


図 2

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など